

## 「マブルーカ・ザルイさんを偲んで」

吉村 慎太郎

無類の語学好きで長らく本学部の事務に務められていた方（塚本英子さん）からの依頼がこの記事を書くきっかけとなった。その依頼とは、2005年8月に逝去されたマブルーカ・ザルイさんの著書（『アラビア語動詞活用表』創英社／三省堂書店、2012年10月）が刊行されたのを契機に、彼女を偲ぶ文章を書いてもらえないだろうかというものであった。

しかし、マブルーカさんが祖国チュニジアと日本をこよなく愛し、懸命にアラビア語教育に従事されてきたことを、中東研究にたずさわりながらも、浅学の私はまったく存知あげなかった。ましてや、彼女が総合科学研究科の前身とも言える地域研究科に1984年～86年まで在籍され、「日仏両国語の表現に関する比較研究」（指導教員 永尾章曹先生）を執筆して修士課程を修了されていたことなど、知るよしもなかった。

その後、当時のマブルーカさんを知る樫原修先生から拝借した彼女の著書『チュニジア女性日本「語」体験記』（三省堂選書、1992年）と、彼女への追悼文が寄稿されている「チュニジア通信」（第18号、日本チュニジア協会発行）を読ませて頂くうちに、在籍中に広島大学留学生協会会長も務められていた彼女が、文化的にも遠く離れた日本、特に広島（大学）において、留学生を含めた多くの人々との出会いから、日本語・日本人、そして日本文化のあり様を考え、またいかに理解されていったかを知った。その端々に見えるのは、マブルーカさんの極めて鋭い論理的な思考力、他者への温かな眼差しや思いやり、さらに力強く生き抜く意志の強さと謙虚な自省的な気持ちである。そして、彼女の教育活動に対して、「外務大臣表彰」も贈られたと聞いた。マブルーカさんの貢献は、確かに日本の若者に引き継がれるべき多くの遺産を残したがゆえに、そうした表彰にふさわしい。

近年、日本の大学生が内向きで、学生時代の特権とも言える留学に消極的であるという。そうしたなか、2011年度から広島大学でも国連公用語のひとつ、アラビア語が初修外国語として開講された。「これでさらに世界が広がった」などと、形式論にとどまってもいけない。英語や初修外国語の習得を通じて果敢に世界に飛び出していく覚悟と計画性、そして知的な好奇心と実力を養う可能性が今ひとつ増えたにすぎないからである。

48歳の若さで亡くなられたマブルーカさんに直接お会いできなかったが、本学出身の身近で好奇心旺盛な優れた先輩であった彼女の冥福を改めて祈りたい。そして、マブルーカさんの生き方から多くを广大生、特に総科生に学んでもらえればと思ってやまない。

